

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県における特別学級の歴史 [2] : 興那嶺惟俊と渡慶次小学校の「盲啞教育」

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸崎, 敬子, Tozaki, Noriko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2110

沖縄県における特別学級の歴史[Ⅱ]

— 與那嶺惟俊と渡慶次小学校の「盲啞教育」—

戸崎敬子¹

A Historical Study of Special Classes in Okinawa Prefecture[Ⅱ]:
Focusing on Ishun Yonamine and His Educational Practice for Children with
Visual or Hearing Disabilities in Tokeshi Elementary School

Noriko Tozaki

Summary

The purpose of this paper is to explore the first case of educational practice for children with disabilities in Okinawa Prefecture. It was a class specifically targeted at children with visual or hearing disabilities and was developed in Tokeshi elementary school by Ishun Yonamine, the principal of the school at the time. This paper attempts to clarify the actual status of the class, using mainly a report by Yonamine, which was found recently in an old issue of educational magazine. The report was based on his experiences with educational practice for children with visual or hearing disabilities. The results of this study were as follows; 1) It is likely that the practice of special class started in 1906, because the head of Nakagami County ordered Tokeshi elementary school to decrease the children who could not enter school and Yonamine had been much interested in educating these children with special needs. 2) The students of the class were those with visual or hearing disabilities in the school district, and 3) The class was closed down in 1908 when Yonamine went to Tokyo to study education for children with visual or hearing disabilities. While he was studying in Tokyo, he was forced to transfer from Tokeshi elementary school to a different school. Therefore, the class existed only for nearly two years.

はじめに

読谷村立渡慶次小学校には「沖縄県障害児教育発祥校」の記念碑が建てられている。これは1982(昭和57)年2月に、国際障害者年(1981年)にちなみ、同校とPTAにより建てられたものである。この碑建立の根拠となったのは、渡慶次小学校の「盲啞教育」について紹介した、次のような1907

(明治40)年の『琉球新報』記事である。

「盲啞児童の教育 不具者の教育に就いては全く閑却せられ居る有様なるが、此程渡慶次尋常小学校長與那嶺惟俊氏は進で全校学区内の盲啞児童を教育せんとし、既に相当の準備を整へて授業を始めたる由なるが、父兄の歡喜一方ならず、皆此篤志を賞揚し居ると云ふ。尚ほ聞く所に依れば、全氏は平素職務に対して頗る忠実に

¹障害児教育教室

従事し万事に熱誠なる上に、夙に盲啞児童の教育に着目して数年来熱心研究する所あり。未だ実地に試みたる事は無けれど漸次経験を重ぬるに随って成績を挙ぐるに至るべく、兎に角本県に於ける不具者教育の嚆矢として大に歓迎すべき事業ならんかと云ふ。」(句読点は筆者)

この『琉球新報』の記事を根拠とした與那嶺惟俊による渡慶次小学校の「盲啞教育」の試みについては、既にいくつかの文献で紹介されている。たとえば、『沖縄盲学校50周年記念誌』(1971)では、「戦前の沿革」の「はじめに」の部分でこの新聞記事そのものが紹介されている¹⁾。解説は殆どなく記事の紹介のみである。また、『沖縄県の特設教育史』(1983)には当該記事の冒頭部分の紹介がされている²⁾。ここにおいても、渡慶次小学校の事例についてのそれ以上の記述は見られない。

渡慶次小学校における「盲啞教育」の実践については、渡慶次小学校の『創立一〇〇周年記念誌』(2002)に「障害児教育の先駆者與那嶺惟俊氏」として言及されている³⁾。ここでは、単なる『琉球新報』記事の紹介ではなく、当時の「盲啞教育」の全国的状況を視野に入れながら、與那嶺惟俊が「盲啞教育」に関心を持った要因や過程についても述べられている。與那嶺を中心に渡慶次小学校の当該事例の分析を行ったこと自体画期的なことである。また、当時の同校の在学生の聞き取りにより、そうした実践が確かに存在したことが確認されている点も含め、当該記念誌の意義は大きい。しかし、ここには、未だ事実を確定するには至っていない事項の記述がいくつか見られる。たとえば、「沿革」とした年表によると、明治40(1907)年の4月5日が「第二代目校長与那嶺惟俊先生によって、沖縄で初めて盲啞教室が開設される」⁴⁾とされているが、4月5日は『琉球新報』に記事が掲載された日であり、「盲啞教育」開始の時期ではない。

以上のように、すでに、渡慶次小学校における「盲啞児童の教育」についての『琉球新報』記事はいくつかの文献で紹介され、この事例により渡慶次小学校を沖縄県の「障害児教育の発祥校」⁵⁾とする認識が定着している。しかし、この実践が

どのような過程で取り組まれることになったのか、その経過(成立過程)、消滅の時期とその要因、実践の実態、與那嶺という教育者のこの実践との関係、與那嶺の経歴等、未解明な部分が多く、本格的な研究はこれからといってよい状況にある。

このような問題認識を持っていた筆者は、與那嶺惟俊本人による手記「盲啞教育の思ひ出」を『沖縄教育』(1937)誌上に見出した⁶⁾。当該誌は沖縄県教育会の創立50周年の記念誌で、そこに與那嶺がこうしたタイトルで手記を寄せていること自体、與那嶺が沖縄県の「盲啞教育」における先駆者としての役割を果たしたことの証左となる。この手記は與那嶺が自身との関わりで沖縄県の「盲啞教育」の沿革を述べたものであり、渡慶次小学校に「特別学級」を組織したことなどに言及し、これまで未解明であった部分を埋める史料として貴重なものである。しかし、これは彼の手記であるという史料の限界性を認識する必要がある。すなわち、ここに述べられていることがすべて事実であると断定することは出来ないということである。

そこで本報告では、この「盲啞教育の思ひ出」及び関連史料により、渡慶次小学校の「盲啞」児童のための「特別学級」の成立過程、消滅の時期と要因、実践の実態、與那嶺のその後の「盲啞教育」との関わりについて明らかにし、できるだけ事実を確定することに取り組みたい。

1. 渡慶次小学校の「盲啞教育」成立の要因と成立時期。

與那嶺惟俊は1877(明治10)年8月中頭郡中城村に生まれ、首里小学校を卒業、1894(明治27)年4月沖縄県尋常師範学校に入学、1898(明治31)年同校を卒業し、中頭郡野国尋常小学校訓導となった。その後、1900(明治33)年同郡北谷尋常小学校訓導(中頭高等小学校訓導兼務)、同10月與勝尋常小学校訓導、1902(明治35)年與勝尋常高等小学校訓導を務め、1904(明治37)年7月同郡濱尋常小学校訓導兼校長となり、翌1905(明治38)年11月渡慶次小学校に訓導兼校長として赴任した⁷⁾。

上述の手記「盲啞教育の思ひ出」によると、当

時渡慶次小学校の校区には「二人の盲児と四人の聾啞児」がいたという。明治期沖縄県は義務教育の普及が教育界の最大の課題であった。「皇民化教育・同化教育を一般民衆レベルにまで徹底させる」⁶⁾ためであった。

1902（明治35）年5月5日の『琉球新報』に掲載された「読谷山間切の学事」の記事⁷⁾には、「国民教育の普及県下に冠たり 読谷山間切学事の進歩は実に予想の外にして国民教育の普及せること他郡区に其比を見ず、国民教育の普及県下に冠絶せりといふも過言にあらざるなり。」（句読点は引用者）と述べられ、同間切（村）内の読谷山尋常高等小学校、渡慶次尋常小学校、古堅尋常小学校の3校の学齢児童数、就学児童数、免除、学齢児童数に対する就学児童数の百分比が記録されている。3校合わせた就学児童の比は99.39という高率を示している。当時の沖縄県全体の就学率（78.24%）と比べたときその高さは特筆される。そこにはさらに以下のように述べられている。

「右表中『免除』は不具廃疾にして到底就学を許すへからざる性質の者にして他郡区の如く不就学児童、就学猶予の児童は一人もなく則ち不具廃疾の己を得ざる事情ある者の外は総て皆な学校教育をうけ居れば、読谷山間切の学齢児童は殆ど皆就学せりと云ふも不可なかるべく（後略）」

既に、1902（明治35）年にはこのような状態にあった。そして、與那嶺が渡慶次に赴任した当時、中頭郡の郡長朝武士干城から、渡慶次小学校に「出席、就学共に九九%以上にすべし」との「内命」を受けたという。こうした状況の中で、與那嶺が考えた就学者を拡大する道は、「盲啞児」を就学させるという方向であったと考えられる。

それでは、「盲啞児」を教育するという考えを生み出す與那嶺自身の必然性は何であったろうか。手記の中で與那嶺は、「その時私は幾分この特殊教育に就きては研究の歩を進めて居る最中であつたので（後略）」⁸⁾と述べている。また同手記の中で彼は「抑も抑も拙者が盲啞教育に志したのは卒業当時からで、いろいろと其の動機になつた事があつたけれども（中略）」と、既に卒業当時から「盲啞教育」に関心があったことを記している。

上述のように與那嶺が師範学校を卒業したのは1898（明治31）年である。この頃日本における「盲・聾啞教育」の状況は、盲啞学校が全国に7校（うち私立5校）が存在し、明治30年代をとおして学校数が増大をしていく時期を迎えていた。

同年の12月に開催された私立沖縄教育会¹⁾の「常集会」では、会長の師範学校長小川銀太郎による「盲啞教育談」の講演が行われている。その概要は「（小川は・引用者）先キニ公用ニテ上京セラレシガ本題ニ於テイテ話サレシハ上京中東京盲啞学校ヲ実地參觀セラレシ所ニヨリ盲啞教育ノ困難ナルコト教師ノ熱心ナルコト又盲生点字法啞生発音法等成績品ニ就キテ話サレタリ」というものであった。この会には師範学校を卒業し小学校教員になったばかりの與那嶺が出席し、「盲啞教育」への関心を育てていったことは十分考えられる。

さらに、1903（明治36）年1月3日付の『琉球新報』には、前年に実施された調査に基づいた「県下管内学事統計一覧表」にある「学齢児童中の盲啞者」数を掲載し、「此等は教育家及び医学者の今後大に研究すへき問題なり」と述べている²⁾ことを見ると、沖縄県において、学齢「盲啞児」の問題がやつと教育問題として認識され始めたことが窺える。

以上のように、與那嶺が渡慶次小学校で「盲啞教育」の実践を開始した要因は、渡慶次小学校が未就学児童を無くするという課題を負っていたことと、與那嶺自身が既にこの教育に関心を持ち、研究を開始していたという状況が重なったことによる。さらには「盲啞児童」の教育問題への関係者の認識が見られ始まった時代背景も関わっていると考えられる。

次に開始時期について検討したい。渡慶次小学校には戦災により学校沿革誌等の史料が存在しない。そのため、事実を確定する作業は困難である。先行研究においては、ほぼ、『琉球新報』記事が掲載された年月を以て渡慶次小学校の「盲啞教育」の開始とされている³⁾。しかし開始時期ついて與那嶺は手記で次のように述べている。

「その時（1905・明治38年11月の渡慶次小学校への転任時・・引用者）私は幾分この特殊教育に就きては研究の歩を進めて居る最中であつたので、翌明治三十九年一月旬々からこの事業に

着手したが、事は案ずるより産むが易いといふ譬に洩れず、職員諸君の協力と区域内区長有志等の後援に依って、特別学級を組織し仕事は着々と成績を上げて、郡長の所期以上に達したばかりでなく・・・(後略)¹⁴⁾

すなわち、『琉球新報』の記事よりも1年以上前にこの教育への取り組みを開始したとしている。しかも、学校内外の協力・後援があったと述べている。與那嶺は熱心な教育者であったと考えられたと、例えば、1907(明治40)年3月10日付けの『琉球新報』によると、この頃、「去明治三十七八年日露戦役の際、職務格別勉勵」として沖縄県の小学校長15名が全国表彰を受けているがその中の1人は與那嶺であった¹⁵⁾。このような與那嶺への地域住民の信頼は厚かったと考えられ、地域住民の理解と支援も「盲啞教育」に取り組むことができた重要な要因であったと捉えられる。

筆者は、與那嶺の手記にあるように1906(明治39)年中に渡慶次小学校の「盲啞児」のための「特別学級」は開始されたと考える。その根拠のひとつは、與那嶺が「越えて明治四十年の三月には時の学務課長岸本賀昌参事官が態々特殊教育の實際視察といふので来校された事もあった。」¹⁶⁾と述べていることである。與那嶺の記した時期に、岸本が渡慶次小学校の視察を行ったのかどうか、他の史料で確認することはできなかったが、岸本は、第1回の県費留学生として東京で学び、沖縄県参事官、同学務課長を経て1912(明治45)年沖縄で初の衆議院議員選挙に当選した戦前沖縄のエリートであり重要人物である¹⁷⁾。このような人物の視察は地方小学校にとって大きな出来事であり、名譽なことでもあったろう。したがって、このような大事な出来事を間違えて記述することはないのではないかと考えるからである。與那嶺による当該手記の記述の確かさと併せて考えると、岸本が1907(明治40)年3月に同校を視察したのは事実であろうと考えられる。

また筆者は、この岸本の渡慶次小学校視察が、上述の『琉球新報』記事の掲載に影響を与えたのではないかと推測する。岸本の同校視察があったからこそ、上記記事は書かれたのではないかと考えるのである。上記記事を読むと、この記事が與

那嶺への直接的な取材に基づくものではなく、伝聞で書いているような間接的表現が多い。したがって、この記事でいつから開始されたと断定することはできない。しかし、「既に相当の準備を整へて授業を始めたる由なるが」と記されているところから、少なくとも、記事掲載当時(1907年4月5日)既に実践は開始されていたと見ることができる。新学年度早々のこの時期でこのような事実があるとすれば、前年度中に開始されていると見ることが妥当であろう。

以上のことから、筆者は、渡慶次小学校で「盲啞児童」の特別学級が組織され、教育が開始されたのは1906(明治39)年1月～1906(明治39)年度中であったと考える。

2. 「盲啞教育」(特別学級)の実態

「盲啞教育」のための「特別学級」の実態について、與那嶺の手記には詳しい記述はない。開設当時の対象は校区内の「二人の盲児と四人の聾啞児」であったと考えられるが、果たしてこの対象児のすべてが実際通学し教育を受けたのかどうかを確定する史料は見出されていない。ただ、1928(昭和3)年1月21日付けの大阪毎日新聞に掲載された「幾多の困苦に打ち克ち沖縄に盲啞教育の基礎を築いた與那嶺氏」という投稿記事¹⁸⁾においても、「(明治)卅九年中頭郡渡慶次小学校長となるや、学齡内の盲児二名、啞児四名に特別教育を施した」¹⁹⁾と記されていることを勘案すると、開始当初の対象児はこの6名であったと言えるであろう。指導者は與那嶺自身であった。

一方、上述の渡慶次小学校『創立一〇〇周年記念誌』掲載の学校史には、與那嶺の「盲啞教育」実践が行われていた時期の在学者や教員の「わずかの伝聞」として次のように記されている。

「入学した障害児童は、男四名、女一名の計五名で、みんな啞者であった。年齢はそろって明治二七年生まれの一三歳。與那嶺氏はすでに障害児教育について相当の研究をつんで居り、校長室を利用して、氏自身が全面的に指導に当たり、他の職員は殆どタッチしなかつたので、教授方法や内容について記憶していることがない。」¹⁹⁾

この根拠となった、当時の在學生、儀間玉永氏が「沖縄障害児教育発祥校」の記念碑を建てる過程で作成し学校に提出した（1981年か）と思われる記録が渡慶次小学校に保管されている。それは「沖縄初の聾唖学校開設記録」のタイトルで、当時の「受講生は男女で五名」とし、この五名の住所、氏名、生年月日の詳細が記されている。さらに、「開設」時期を「明治四十一年～二年」と記している。さらに、儀間氏は渡慶次小学校の『75周年記念誌』のなかで自分が「明治三十九年四月六日の本校新入生」であること、「明治四十一年、二年頃に沖縄で初めて盲唖教室を第二代目の校長、与那嶺先生が開設された」こと等を述べている²⁰⁾。

この記述は儀間氏の記憶によるものであるが、後に述べる理由で、1908（明治41）年には與那嶺はすでに渡慶次小学校には居なかったもので、これらの記憶は、前年の1907（明治40）年度中のものであったろうと考えられる。すなわち、明治40年度において、当該「特別学級」は校長室にあり、與那嶺自身が「聾唖児」5名に対して教育を行ったということであろう。そして当時與那嶺はすでにこの種の教育についてかなりの研鑽を積んでいたということである。このように見ると、明治40年度に限っては、児童は「聾唖児」のみとなっており、開始当時対象とされた「盲児」がどのような過程で在籍しなくなったのか不明である。

また、與那嶺の手記には、1907（明治40）年秋に島尻郡小禄尋常高等小学校で開催された島尻郡主催の教育品展覧会に「盲唖児の成績品を出品して教育界の注視を引いた」²¹⁾と述べられている。また、渡慶次小学校の「展覧会並に父兄農産物品評会」という『琉球新報』の記事には、児童作品の展示の中に「殊に聾生四人の縫ひ取り、書方、図画は人目を引けり」²²⁾とあり、当該学級の教育の成果が記されている。

以上述べたように、渡慶次小学校の「盲唖教育」の実態を解明するための材料は極めて少なく、どのような教育が行われたのかは殆ど不明である。

3. 渡慶次小学校「盲唖教育」（特別学級）の消滅の要因とその時期

渡慶次小学校の「盲唖教育」がいつ消滅したのかについてはこれまで明らかにされていない。同校の『創立一〇〇周年記念誌』においても、「残念なことに、この与那嶺氏の障害児教育がその後どうなったか、どの位継続し、どんな成果があったかについては全く分かっていない。恐らく同氏の転出などで、折角の渡慶次小学校の障害児教育も途絶えてしまったに違いない。」²³⁾と述べられ、與那嶺の転出によって消滅したと推測している。しかし、その転出がいつであったのかについては記録されていない。ちなみに、與那嶺が校長をしていた時期について、同校の記念誌等では、全く確定されていない。さらに、『美東小学校創立九十周年記念誌』（1992）によると、與那嶺は当該校の3代目の校長として1907（明治40）年3月31日に同校に着任し4年間校長として在職したとされている²⁴⁾。しかし、1907年3月31日着任というのは誤りである。なぜなら、上述のように、この頃與那嶺は渡慶次小学校で「盲唖教育」を実践していたからである。

與那嶺は手記「盲唖教育の思ひ出」において、渡慶次小学校の実践が消滅した要因と時期に関連して次のように記述している。

「越えて明治四十一年頃からは私も随分興味を覚えて来た事とて、愈々本格的に特殊教育に乗り出さうといふ考へから、全年四月自費出張の許可を得て東京盲唖学校へ研究の爲め出張した。折も折中央の学界では東京盲唖学校長の小西信八先生等が『小学校に盲唖の特別学級を附設すべし』といふ事を盛に論議されて居た時でもあったし、又文部省では東京盲唖学校内で第一回盲唖教員養成の講習開催中で本県からもその先覚者として高良忠成君が入所されて居ったので、私も研究に一段の便利を得、斯くして半年を経過し十月に帰県したが、私は恰度東京出張中に全郡美東小学校長に転任を命ぜられて居たため、折角研究して来た事を実際に活用する事が出来ない境遇になった」²⁵⁾

ここから理解できることは、與那嶺は1908

(明治41)年4月の年度当初から10月までの半年間東京盲啞学校へ「盲啞教育」の研究の為出張していたこと、10月の帰県までに、美東小学校に転任することになっていたこと、したがって、渡慶次小学校で「盲啞教育」の実践を再開することはなかったことである。

與那嶺の東京出張を裏付ける確たる史料はないが、『沖繩教育』第31号(1908年9月)に次のような記述が見られる。

「明治四十年一月郡内(中頭郡・・引用者)教員の有志者をして義金を蓄積せしめ、学事視察、講習会等に出張せんとする教員に貸与し、その修養に便ならしめんため教員修養義会なるものを組織し、其貯金を以て他府県学事視察に出張し、社会教育及び教授訓練、学校園等につき調査を遂げしもの四十年七人を出し帰県、郡教育に貢献する所鮮からざりき。目下学事視察を兼ね盲啞教育に付き取調中のものあれば、帰県後期待する所蓋し多かるべし。」²⁶⁾(句読点、下線は引用者)

ここに言及されている1908(明治41)年9月当時、「盲啞教育に付き取調」のため出張中の者とは、與那嶺のことであろう。

上述のように、渡慶次小学校における「盲啞教育」の実践は、学校や地域から支持されていたとはいえ、あくまでも與那嶺だけによる教育実践であった。それゆえ、與那嶺が存在しなければ実践自体も存在し得ないものであった。したがって、当該校における「盲啞教育」の試みは、與那嶺自身が渡慶次小学校に存在した1908(明治41)年3月末をもって消滅したと考えられる。與那嶺の考えではそれは、いったん休止するというものであったろうが、與那嶺が他校に転出したことよって、二度と再開することは不可能となった。

4. その後の與那嶺惟俊と沖繩県教育会付設「沖繩盲啞院」

渡慶次小学校を転出した後も、與那嶺の「盲啞教育」への努力は続けられる。彼の手記を中心にその経過を追ってみたい²⁷⁾。美東小学校在職中は、「美東校区域内に居た啞児で白痴であった一

人の男児」に時折り教育を行い、特殊教育への意欲は途絶えることはなかったようである。1912(明治45)年、與那嶺は公職を辞し、那覇市で「盲啞教育」の教育機関を創立しようとしたが、思うように進まなかった。この間、那覇市に住んでいた渡慶次小学校で教えた「聾啞の生徒」とその他二人の「聾啞児」計3人に対して、3年間自ら学資を与えて教育したという。1915(大正4)年には「日々の生活に随分窮する」ようになった状況を見かねた教師時代の先輩が国頭郡長に働きかけた結果、その年の5月に国頭郡恩納小学校長として教職に復帰することとなった。

翌年鈴木邦義が沖繩県知事に赴任した。鈴木は赴任早々、沖繩県に盲啞児の多いことに気づき、8月ごろ各郡市に「盲啞学齡兒童の實際調査」を命じたという。この状況において與那嶺は「好機逸すべからず」と「盲啞教育開始の建白書」を鈴木知事に提出したという。さらに鈴木は、8月末頃の国頭郡視察の帰路、恩納小学校に立ち寄り、随員に與那嶺の「盲啞教育」に関する意見を聴取させた。その一ヵ月後、渡嘉敷唯功県視学が恩納小学校に出張し、「三ヶ年程度の盲啞教育実施案」を調製して帰庁した。與那嶺の手記によれば、これが元になり、翌1917(大正6)年4月末の県教育会代議員会で「盲啞教育」案が採択され、5月初めより「沖繩県教育会付設沖繩盲啞院」の授業が開始されたとしている。

この県教育会による「盲啞院」については、上述の『沖繩県の特殊教育史』(1983)においても言及されている。それによると、鈴木沖繩県知事の呼びかけで県教育会が「私立盲啞院」設立の審議を行い代議員会で審議決定しているが、同盲啞院が「実現したかどうかわからない」としている²⁸⁾。

『琉球新報』には沖繩県教育会付設の盲啞院に関する記事がいくつか掲載されている。これをもとに、與那嶺の手記の裏づけを行いたい。『琉球新報』には、まず1917(大正6)年1月24日付けには次のような記事が見られる。

「本県に於て学齡の盲啞兒童は凡そ七十名なるが、此程教育会に於て盲啞教育院設立の計画ある由にて、鈴木知事より熱心に希望し居る由なれば近く代議員会を開き設立に就き研究し来る

七月より開始の運びにいたるべしと云ふ²⁹⁾

ここから、この事業は鈴木知事の熱望によるところのものであることが理解できる。

当該盲啞院に関する県教育会代議委員会の審議は、同年5月26日に行われている。そこでは、「盲啞院施設経営案」及び「私立盲啞院規則」等が審議決定されている。「盲啞院施設経営案」によると、①盲啞院は沖縄県教育会の付属事業として那覇区教育部会に依托する、②本院の規則は別案による、③校舎は当分那覇区内適当の場所に置く、④当面那覇区内在住の盲啞児から希望者を收容する（希望者現在盲4名、啞16名）、⑤編制は盲啞の複式学級とする、⑥生徒は当面通学生のみとする、⑦教員としては元恩納小学校長與那嶺惟俊が担任する（報酬年60円）、⑧経費は鈴木知事の寄付金、教育会費、及び一般の寄付等による、等々である。また盲啞院の「備品即ち教授用器具機械」は與那嶺の寄贈による55種198点に依り、漸次完備するとされた³⁰⁾。

「私立沖縄盲啞院規則」には、第一条で「本院は盲啞師弟に普通教育を施し且つ自活に必要な技術を授くるを以て目的とす」とその目的が明記されている。学科目（第3条）は「盲人」には「修身、国語、算術、体操、音楽、生理、按摩、鍼治」、「聾啞」には「修身、国語、算術、体操、図画、裁縫、手芸」、授業時間（第4条）は一週24時間乃至30時間、修業年限（第5条）は三ヶ年、入学者の年齢（第11条）は満10歳以上20歳以下、等が規定されている³¹⁾。

さらに、6月11日付け『琉球新報』には「盲啞学校経費」として、教育会に鈴木知事から百円の寄付があったことが記されている³²⁾。

以上のように、本事業が、支援者としての鈴木、実践者としての與那嶺の力に負うところが大きいことを示している。ところで與那嶺はなぜこの盲啞院の教員として関わることになったのであろうか。これについて與那嶺の手記は、「而して此の際悦かも大正六年二月初めの県下小学校教員大異動に際して、私は或る事情の為に恩納校を辞して居る時であったが、その（盲啞院の・・・引用者）経営には月額五円の報酬を与えて私に当らしめるといふ事になった³³⁾と記している。「或る事情」

の内容については確認できないが、同年2月に県下の小学校教員の大異動があり小学校教員の「整理」³⁴⁾が行われたことは事実である。そして、2月14日の『琉球新報』記事は「小学校長淘汰」として「小学校長更迭の結果により先の各校長はそれぞれ郡区長より辞表提出を勧告され何れも辞表を提出せり」と述べ、13名の校長の氏名が記されている³⁵⁾。そのうちの一人が「恩納尋高校長 與那嶺惟俊」であった。

このようにして、2月に校長職を辞した與那嶺は、あたかもそれを待っていたかのように進められた沖縄県教育会付設沖縄盲啞院の教員としての仕事に邁進することになる。その報酬は年額60円月額5円という低さであった。ちなみに、與那嶺退任後恩納小学校の校長となった島袋慶福によると、「泊小学校教頭の時、二十七円に増俸して恩納尋高校長になった³⁶⁾と述べていることから、月額5円がいかに低い報酬であるかが分かる。

しかし、報酬の低さにも関わらず、與那嶺は「素志を貫徹すべく」この「盲啞院」を軌道に乗せるため、児童勧誘や、教場の確保等に走り回った³⁷⁾。こうして、実際に授業が開始されたのは同年6月13日午後4時である³⁸⁾。場所は私立女子技芸学校の終業後、その教室を使用するというものであった。與那嶺が苦勞し募集した入校者は「盲児四名聾啞児七名」であった³⁹⁾。始業日前日には「盲啞生父兄会」が開催され、與那嶺も出席、教育法などの説明を行っている⁴⁰⁾。盲啞院の教場はその後、県議会議事堂内新聞記者室、那覇尋常小学校内、と転々とし、1919（大正8）年6月には日本基督教会の一室を使用することになる。

こうした経過の中、盲啞院の生みの親であり、最大の経済的な支援者であった鈴木知事が1919（大正8）年5月に休職、帰郷することとなり、盲啞院はその存在基盤を失うこととなった。鈴木知事の寄付金は翌年3月まで続いたらしい。そして生徒たちは1920（大正9）年3月をもって目的とした3ヶ年程度の課程を終えた。この時期まで鈴木知事の寄付は続いたということである。その後、鈴木が去り、経済的支援を失った盲啞院は、與那嶺の手記に依れば「教育会としても費用支出の方法が講ぜられず、又私個人としても世の好景気時代に處して月五円の報酬で三ヶ年間を暮した結果

どうしても経済が続かず」⁴⁴⁾ひとまず中止となった。

ついでながら、1919（大正8）年の暮れには、後の私立沖縄盲学校長の高橋福治（宮崎県生まれ）から、県庁に沖縄県における盲教育に関する問い合わせの手紙が寄せられた。そこには沖縄県に盲学校があるかという趣旨の質問があり、それに対して県は「盲学校はない」と答えている。この返事により沖縄県での盲教育を志した高橋は、1920（大正9）年3月18日に単身来沖し、これから彼の沖縄県における盲教育への努力が始まる。さまざまな経過を経て、1924（大正13）年には、「私立沖縄盲学校」として文部省の認可を受ける⁴⁵⁾。

このように見てくると、與那嶺の関わった教育会付設の「盲啞院」は、沖縄県の視覚障害教育において、高橋福治による「盲教育」へとつなぐ歴史的役割を果たしたことになる。沖縄県に盲学校はないとする県の回答は、既にこの時点で盲啞院の廃止は決められていたということであろう。

まとめ

沖縄県障害児教育の嚆矢として知られながら、その実態が殆ど解明されてこなかった、與那嶺惟俊による渡慶次小学校の「盲啞教育」（特別学級）及びその後の與那嶺惟俊と「盲啞教育」との関わりを明らかにしようと試みた。與那嶺自身による手記「盲啞教育の思ひ出」に記述された内容をできるかぎり他の史料で裏づけながら、事実を明らかにしようとした。しかし、決定的な史料（例えば学校沿革誌などの学校保存の史料）に欠け、明らかにできたことは少ない。戦前の沖縄県の教育史研究の難しさを痛感させられた。本報告で明らかになったことを述べれば、以下のとおりである。

渡慶次小学校の盲啞教育は、他の教職員や村民の理解を受けていたとはいえ、学校全体の取り組みというよりも、與那嶺惟俊一人による実践であり、校長室を「特別学級」にして取り組んだものである。それを成立させた要因は、渡慶次小学校が不就学児童を無くするという課題を負っていたことと、與那嶺自身が既にこの教育に関心を持ち、研究を開始していたという状況が重なったことによる。開始時期は、確定は出来なかったが、可能

性の或る時期としては、與那嶺の手記にある1906（明治39）年1月から1907（明治40）年3月末の間であるが、1906（明治39）年に開設されたと考えるのが妥当であろう。

開設当初の対象児童は校区内の盲児2人、聾啞児4人であったが、当時の渡慶次小学校在校生の記憶（1907、明治40年度と推測される）では「聾啞児」男4名、女1名と記憶されており、この時点では「盲児」は在籍していない。教育内容や方法は不明である。ただ、與那嶺が東京盲啞学校等の方法を自ら学びながら子どもにあった方法で行っていたと考えられる。

渡慶次小学校の「盲啞教育」は1908（明治41）年3月（すなわち明治40年度末）まで存在したと考えられる。そして、同年4月に與那嶺が東京盲啞学校に研修に出、渡慶次小学校を離れたことが消滅の要因である。與那嶺自身は一時休止し帰沖後再開するという意図であったろうが、與那嶺が渡慶次に戻ることはなかった。すなわち、與那嶺によって行われた取り組みは、與那嶺の不在によって自ずと消滅せざるを得なかったのである。

渡慶次小学校以後の與那嶺惟俊の活動の中で、沖縄県教育会付設の「沖縄盲啞院」との関わりは重要である。その成立過程において影響を与えただけでなく、生徒募集や場所の確保そして日々の実践すべてが彼によってなされている。與那嶺は、沖縄県の障害児教育において、高橋福治による盲教育実践へとつなぐ歴史的役割を果たしたことになる。

課題はたくさん残されたが、渡慶次小学校の実態を解明することは、現在殆ど困難となっている。戦災で学校保存の史料が焼けてしまったことが、解明を決定的に困難にしている。さらに、当時の生徒や教師などの聞き取りもはや不可能となっている。今後新たな史料が発見されることを願ってやまない。

註

- 1) 宮城康輝（1971）沖縄盲学校50周年記念誌、沖縄盲学校、10頁。
- 2) 沖縄県の特殊教育史編纂委員会（1983）沖縄県の特殊教育史、沖縄県教育委員会、91

- 頁。
- 3) 渡慶次小学校創立一〇〇周年記念誌編集委員会(2002)創立一〇〇周年記念誌、渡慶次小学校一〇〇周年記念事業期成会、33-37頁。
 - 4) 前掲、創立一〇〇周年記念誌、95頁。
 - 5) 沖縄タイムス、1981年12月5日、朝刊。琉球新報、1982年2月27日、朝刊。
 - 6) 興那嶺惟俊(1937)盲啞教育の思ひ出、沖縄教育、第247号、83-86頁。
 - 7) 楢原翠邦(1916)沖縄県人事録、沖縄県人事録編纂所、180頁。読谷村史編集委員会(1986)読谷村史 第2巻資料編1 戦前新聞集成上、166頁。前掲 盲啞教育の思ひ出、83頁。
 - 8) 浅野誠(1991)沖縄県の教育史、思文閣、185頁。
 - 9) 琉球新報、1902(明治35)年5月5日記事。沖縄県(1966)沖縄県史、第18巻資料編8新聞集成(教育)、165頁。
 - 10) 前掲、盲啞教育の思ひ出、83頁。
 - 11) 1886(明治19)年1月、沖縄私立教育会創立(県学務当局、師範学校・中学校、小学校教員等の有志で組織)。1891(明治24)年、私立沖縄教育会。1904(明治37)年沖縄教育会。1914(大正3)年、沖縄県教育会。
 - 12) 琉球新報、1903(明治36)年1月3日、沖縄県(1966)沖縄県史、第18巻資料編8新聞集成(教育)、188-189頁。
 - 13) 前掲、(渡慶次小学校)創立一〇〇周年記念誌、沖縄県の特種教育史。
 - 14) 前掲、盲啞教育の思ひ出、83頁。
 - 15) 琉球新報、1907(明治40)年3月10日、前掲 読谷村史 第2巻、196頁。
 - 16) 前掲、盲啞教育の思ひ出、84頁。
 - 17) 琉球新報社編(1972)近代沖縄の人びと、太平出版社、64-65頁。
 - 18) 読谷村史編集委員会(1986)読谷村史 第2巻資料編1 戦前新聞集成下、228頁。
 - 19) 前掲、創立一〇〇周年記念誌、35頁。
 - 20) 渡慶次小学校75周年記念事業期成会(1977)75周年記念誌、同会、18頁。
 - 21) 前掲、盲啞教育の思ひ出、84頁。
 - 22) 琉球新報、1907(明治40)年12月26日、読谷村史第2巻資料編1 戦前新聞集成上、237頁。
 - 23) 前掲、創立一〇〇周年記念誌、35頁。
 - 24) 美東小学校創立九十周年記念事業期成会(1992)美東小学校創立九十年記念誌、美東小学校、79頁。
 - 25) 前掲、盲啞教育の思ひ出、84頁。
 - 26) 無署名(1908)中頭郡初等教育沿革、沖縄教育、第31号、11頁。
 - 27) 前掲、盲啞教育の思ひ出、84-86頁。
 - 28) 前掲、沖縄県の特種教育史、92頁。
 - 29) 前掲、沖縄県史、第18巻資料編8新聞集成(教育)、906-907頁。
 - 30) 琉球新報、1917(大正6)年5月25日、前掲、沖縄県史、第18巻資料編8新聞集成(教育)、918頁。
 - 31) 琉球新報、1917(大正6)年5月27日、同上沖縄県史、第18巻、919頁。
 - 32) 同上、920頁。
 - 33) 前掲、盲啞教育の思ひ出、85頁。
 - 34) 琉球新報、1917(大正6)年2月14日、前掲、沖縄県史、第18巻資料編8新聞集成(教育)、907頁。
 - 34) 同上、沖縄県史、第18巻、920頁。
 - 36) 恩納小学校創立百周年記念事業期成会(1984)恩納小学校創立百周年記念誌、恩納小中学校、366頁。
 - 37) 前掲、盲啞教育の思ひ出、85頁。
 - 38) 琉球新報、1917(大正6)年6月11日、前掲、沖縄県史、第18巻資料編8新聞集成(教育)、920頁。
 - 39) 前掲、盲啞教育の思ひ出、85頁。
 - 40) 琉球新報、1917(大正6)年6月11日、前掲、沖縄県史、第18巻資料編8新聞集成(教育)、920頁。
 - 41) 前掲、盲啞教育の思ひ出、86頁。
 - 42) 前掲、沖縄盲学校50周年記念誌、11頁。